

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2009-5

発行日：平成21年6月1日

発行元：計画・交通研究会

目次

Opinion	1
現代日本人が飢えているもの	
News Letters	2-7
事業報告・活動報告	
Backyard	8
事務局通信	

□ Opinion 現代日本人が飢えているもの 東京大学 中井 祐

昨年3月、筆者が属する景観研究室で設計を担当した、コロンビア国メデジン市ベレン地区の公園図書館が竣工し、完成式典に出席した。そのとき以来考えていることを書きたい。

メデジン市は、中心部の人口が200万人を超えるコロンビア第二の都市である。1980年代からしばらく、この町は、麻薬やゲリラにより治安が極度に悪化した。人口10万人あたりの殺人発生率は381件（ちなみに日本は0.5件前後）、成人の死亡原因の第一位は殺人だったという。市民は自衛のため家に閉じこもり、屋外で日常を楽しむひとびとの姿は絶えて久しくなった。

状況が劇的に変化したのは今世紀にはいつから、セルジオ・ファハルド前市長による、集中的な公共投資政策以降である。ファハルド氏は、インフラや公共施設整備を軸とする多数の都市開発プロジェクトを実行して治安の大幅な回復を実現したが、その目玉が、不法占拠地区や貧困地区、人口密集地区など五カ所を選んで建設された、公園図書館である。地区の中心に図書館をつくり、教育とコミュニティの核とすることによって、治安や貧困の改善をはかり、ひいては都市に活気と平和をもたらそうとする公共事業である。そのうちのひとつ、ベレン地区（5地区のうちもっとも所得に余裕のある層が住むが、人口密度が高くパブリックスペースに乏しい）の公園図書館の設計を、内藤廣教授をヘッドとするわれわれ景観研究室が担当することになったのである。

設計内容について委細は省くが、われわれは強い個性を備えた三つの広場を計画し、その周

囲に大小15棟の建物を配置した。隣接街路に開かれた「ひとびとの広場」、静謐な中庭空間である「水の広場」、既存の大木をいかした憩いの場としての「緑の広場」。これらの広場で行われた完成式典は、一生忘れ得ないすばらしい体験となった。千人を超える市民が集まり、口々に完成を祝い、子供たちは歓喜の声をあげて走りまわった。われわれ設計チームは、いったい何人から「ありがとう」「おめでとう」「すばらしい」と声をかけられ、ハグされ、握手を求められたかわからない。そうか、この町の人たちは、こんなにも平和に飢えていたのだ。平和を実感できる身近な場所に、心から飢えていたのだ。夢見心地のなかで、そんなことを思っていた。

しかし一夜明け、夢から覚めると同時に、筆者のなかに次の問いが頭をもたげてきた。ひるがえって、われわれ現代日本人が心から飢えているものとは、いったいなんなのだろうか、と。

たとえば戦後復興から高度成長期、日本人は、たしかに飢えていたのだと思う。文字通り食べものに飢えていただけでなく、希望に飢えていた。その希望は公共事業（土木）に託された。新幹線も黒四ダムも、東京タワーも首都高も、当時は日本の、あるいは東京の未来を切り拓く夢と希望の造形物だった。

そして戦後50年の努力で、全国的に生活水準はめざましく向上し、それなりに民主的で平和な社会が実現した。見るからに貧困な集落は目にしなくなり、洪水で何百人もが死ぬこともなくなった。いまや、一日あればほぼ全国どこ

へでも、快適に到達できる。

では現代日本人は、飢えから解放されたのであろうか。そうではない、と思う。

たとえば地方都市の元気のなさは一様に深刻で、商店街はシャッター街化し、地元コミュニティは死に体同然、郊外の二次自然は農業もろとも荒廃し、山間部では多くの集落が絶望的な存続の危機にある。駅前や幹線街路沿いの風景など、どこに行っても見分けがつかない。これが「均衡ある国土の発展」を目指した結果の、一方の現実でもある。いま全国的に盛んな、まちづくりの試行錯誤は、まちがいなく、上記の諸問題に対する反作用であろう。それぞれの町や地域が、それぞれに問題を抱え、悩み、未来を模索している。

あるいは、この便利で安全で経済的には豊かな国で、みずから死を選ぶ人があとを絶たない。1998年に年間自殺者が一気に三万人を突破（人口10万人あたり約25人）、その後減少する気配がない。自殺大国日本。殺人で人が死ぬコロナピアの場合に比して、断じて軽い問題ではない。

これらは、構造的な問題であると同時に、心の問題でもある。「心の問題」とは、それが社会的な価値に関わる問題であるということとは別に、この町・地域を、あるいは自らの生を、いかに生き（続け）てゆくことができるのか、という、個々の生にとっての根源的かつ個別的な価値に関わる問題でもある、という意味である。そして筆者には、この心の問題こそが、言

い換えれば、どうすればいきいきと生きている実感を得られるのかという問いこそが、現代日本に静かに拡がっている飢えの正体のような気がするのである。

では、この心の問題の解決に、土木は寄与することができるのだろうか。筆者はできると信ずる。メデジンの人たちの笑顔を思いだしながら、そう信ずるのである。自殺を止めるのは難しいかもしれないが、少なくとも、この土地、この町、この地域に生きるということの意味や価値に、個別に関わってゆくことは可能なはずである。

ただし、臨床的に関わることが不可欠であると思う。構造的な問題の分析と解決ならば、対象を客観的に把握し、理論に基づいて一般解を求めようとする、従来の科学合理主義的土木の守備範囲である。しかし、都市や地域の問題を心の問題と捉えるならば、その解決のためにひとつひとつの現場に身を投じ、種々の技術や知識や経験を総合しながら、かつ市民と顔をつきあわせながら、それぞれの個別解を模索する、という臨床的方法によるしかないであろう。その過程で、「ぼくたちの町はよくなるかもしれない」「よくしたい」という希望の種を、植えてゆくしかないであろう。土木にはもともとそういう力があると思うし、付言すれば、筆者の専門である景観デザインやまちづくりは、そのような臨床土木の方法論のひとつとして、重要な貢献を果たすことができるはずだ、と考えている。

（東京大学 社会基盤学専攻 准教授）

□ News Letters

事業報告・活動報告 □

■平成21年度 第一回理事会および第31回通常総会の報告

●日時：平成21年4月22日（水）

理事会 16:30～18:00

通常総会 18:00～19:00

場所：プラザエフ 主婦会館

●理事会

- ・理事総数33名のうち、出席15名、委任状提出12名のもと開催された。
- ・平成20年度の事業報告、収支決算、なら

びに平成21年度の事業計画、収支予算につき審議され、原案通り可決され総会に付議することとした。

- ・一般社団法人化の目的、法人の内容、法人化の手続きにつき審議され、定款案の一部の修正を行って進めるよう可決された。
- ・あらたに幹事として、福田大輔 東工大准教授の任命が承認された。
- ・会員の異動につき報告され承認された。

●通常総会

- ・正会員総数122名のうち、出席19名、委任状提出68名のもと開催された。
- ・平成20年度の事業報告、収支決算、ならびに平成21年度の事業計画、収支予算につき審議され、原案通り可決された。
- ・一般社団法人化の目的、法人の内容、法人化の手続きにつき審議され可決された。
- ・新幹事の任命、会員の異動につき報告された。
- ・現場視察会に関し、昨年度春の新東名視察会と秋の常磐地域の港湾と街づくりの視察会、および今年度春の新宿・渋谷大規模ターミナル改造と都市再生視察会の実施状況につき報告され、また、今年度秋に予定する立山・常願寺川地域の視察会についての計画が報告された。

■現場視察会

- 目的：新宿・渋谷視察会（大規模ターミナル改造と都市再生）
- 日時：平成21年4月9日(木)13時～16時30分
- 参加者：森地会長以下39名
- 現地説明・案内

新宿：JR東日本ターミナル計画部 山崎部長、平野担当部長、片岡課長
JR東日本東京工事事務所 熊本所長、山口次長、倉澤課長
渋谷：東急電鉄（株）野本専務取締役、開発事業本部大野事業部長、中田部長、依田課長、鉄道事業本部泉副本部長、福田課長、門田課長、島村部長、岩本課長
東京地下鉄（株）小前取締役、経営企画本部大月部長

当日は、初夏を思わせる暑さの中、参加者は普段は立ち入ることの出来ない現場を熱心に視察、活発な質疑応答の有意義な見学会であった。両地区との森地会長始め何人かの会員が計画に携わったプロジェクトであり、完成形を念頭に描きながらの視察であった。見学会後に渋谷東急インで懇親会が行われ、案内してくれた方々も交え、相互の親睦が図られた。

〔新宿見学会〕

JR東日本本社ビルにて「新宿駅南口地区基盤整備事業」の概要説明を受けた。説明会にはJR東日本富田副社長、林常務取締役が列席されご挨拶された。JR東日本では「駅づくりは街づくり」のキーワードで、新宿をはじめとして東京、渋谷、横浜、池袋、千葉の主要ターミナルに加え、大崎、飯田橋、品川で大規模開発を推進することとしている。説明会の後、2班に分かれて「新宿交通結節点整備事業」の現場を見学した。「新宿駅南口地区基盤整備事業」

新宿駅周辺は、商業、産業、文化の中心として躍動しているが、JR路線を挟んで商圏域が東西に分断されていたり、バス関連施設が分散して利便性が低下していたり、都市的な課題を抱えている。これらの課題に対応すべく本事業を実施している。

- ・跨線橋（一般国道20号線）の架け替え、道路拡幅(35m→50m)
80余年が経過した跨線橋を架け替えると同時に、拡幅する。
- ・新宿交通結節点整備
甲州街道南側の線路の上を活用し、約1.47haの人工地盤を創りだし、この人工地盤上に歩行者広場や交通施設を整備する。これらの施設が完成すると、鉄道と高速バス、自動車、タクシーなどを連携する交通結節点機能が強化される。
- ・地下歩道整備
JR新宿駅と新宿三丁目駅を結ぶ地下道を整備し、歩行空間を確保する。

新宿交通結節点整備事業の現場は、1日約2400本の電車が行き交い、JR14線が営業しているため、夜間3時間余りでの制約された時間内で杭の施工、鉄骨の架設、工事桁の架設を行っている。また、作業空間を確保するために8回もの線路切替を行いながらの施工で、平成27年度完成の予定です。



▲甲州街道南側の人工地盤建設現場



▲セルリアンタワーら望む渋谷・新宿ターミナル周辺の都市再生

〔渋谷見学会〕

東急電鉄本社会議室で「渋谷駅街区基盤整備方針」の概要説明を受けた。説明会には東急電鉄の野本専務取締役、東京地下鉄の小前取締役が列席されご挨拶された。平成24年度には東急東横線が地下化され、平成20年6月に開業した東京メトロ副都心線との相互直通運転が図られる。説明会后セルリアンタワー東急ホテル40階へ移動し、渋谷駅周辺状況を見学、説明を受けた。その後東横線渋谷・代官山間地下化工事現場を見学した。

「渋谷駅街区基盤整備」

渋谷駅は、6駅8線の鉄道路線が結節するとともに、都内最大級のバスターミナルを持つ全国有数の公共交通ターミナルである。平成24年度には東急東横線が地下化され、東京メトロと相互直通運転が図られる。一方駅周辺は、自動車交通の混雑、交通結節機能の強化、歩行者空間の確保など多くの課題を抱えている。これらの課題に対応すべく本事業を実施することになっているが、本格的な着工は東急東横線の地下化後である。

・鉄道施設の整備

埼京線ホームの並列化、銀座線ホームの島式化、乗換えコンコースの拡充

・公共施設の整備

駅前広場の再編・拡充、地下広場の整備、国道246号の拡幅

・駅ビルの再開発

アーバン・コアの整備、敷地内通路・広場の整備

東急東横線渋谷・代官山間地下化事業は、現在高架橋上を運行している渋谷駅から代官山駅までの約1.4kmを地下化ものである。この事業により、東武東上線・西武池袋線から東京メトロ有楽町線・副都心線を経て、東急東横線及びみなとみらい線までがひとつの路線として結ばれ、首都圏の広域的な鉄道ネットワークが形成される。工事現場は、新渋谷駅南端部に設置した発進立坑からシールドマシンでトンネルを掘削するものである。シールドトンネルは、鉄道複線断面形状を合理的に包括する2連矩形断面となっており、特殊なカット機構を持つ泥土圧シールドマシンを使用して掘削する。現在は本掘削に先立つ試運転中であった。

〔文責：鉄建建設(株)鉄道統括室 豊岡昭博〕

■定例研究会

●日時：2009年3月16日

場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

John Andrew Black客員教授（東北大学東北アジア研究センター）

"Spatial Modelling and Commuting: A Summary over 40 Years"

●講演概要

Black教授は40年以上に渡り、空間相互作用モデル、土地利用・交通モデルなどを中心に数多くの優れた研究成果を残しておられ、日本の研究者との親交も深い。今回の講演では、学生時代を含めた過去40年の研究生活を振り返った後、①空間モデル上の重力モデル介入機会理論（Theory of Intervening Opportunities）の比較研究と、②選好関数（Preference Function）と都市構造に関する研究についてご紹介頂いた。また講演の最後に、日本人研究者に期待する次なる研究課題についてのご提言を頂いた。

重力モデルと介在機会モデルの比較はシドニーとキャンベラを対象とした研究で、介在機会モデルは重力モデルよりも精度が高いことを示した。しかし、重力モデルは簡便で扱いやすいことから実務レベルでは好まれている。また選好関数と都市構造については、バンコクやイスタンブールを始め、日本における数多くの都市（東京、札幌など）を対象にした研究成果が示された。例えば通勤者の行動パターンのシミュレーション結果として、通勤者は自宅から通勤場所までの境界内で行動する傾向が強いことを示し、この結果はコンパクトシティの実現に示唆をもたらすと主張されていた。

セミナーには東京都市大学の宮本和明教授を始め、研究者・留学生を含む学生などの参加者があり、講演後の質疑・ディスカッションも極めて活発であった。セミナー終了後には、Black教授を囲んで懇親会も行われた。

(文責：東京工業大学 花岡伸也・川崎智也)

■2009年2月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅷ講・第14回)

- 日時：平成21年2月18日(木)17:00～20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究(11) 観光の意味論(つづき)

- 参加者：12名(うち計交研関係4名)

[講義概要]

◆観光原論研究・11◆(鈴木忠義)

Ⅱ 観光の意味論 1. 第一主体にとって

1.3 観光と生きがい

これからの人々は、日々生き続けること(生活)だけでなく、人生をもっと考えなければいけない。そのためには労働時間を短くして、生きがいを求める必要がある。その重要な手段として、生きがい対象として、観光が重要な意味を持つ。

[命題] 観光は、自らの所得と余暇を消費して感動の機会を求める。→ 生きがい感が得られた機会とほぼ一致する。

(1) 生きがいとは

生きがいとは、以下の①から⑥のように整理され、それぞれ観光に通じる。

- 1) 個人の生存実感(生きる喜び)
→観光は感動を実感する機会を求める。
- 2) 生活の実利とは必ずしも関係しない
→第一主体にとっては消費である。
- 3) 自発性であること
→観光は自分で目的地を決める。
- 4) その人その人の価値体系で異なる
→老弱男女、誰でも観光を楽しむ。(多様性)
- 5) その人独自の心の世界をつくる
→個人の教養のストックが旅の神髄となる。
- 6) 複数の生きがい対象をもつ
→経験を重ねて新たな感動が得られる。

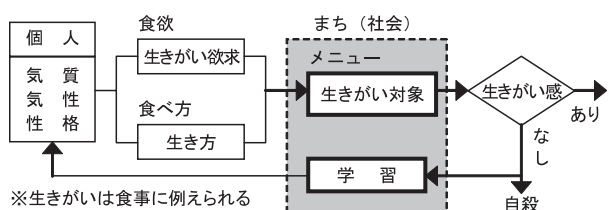
(「人間に学ぶみちづくり」P.45より)

(2) 生きがいの成立モデル

生きがいは、自発性であり、個人の価値で異なる等の点から食事と類似しており、次図のような成立モデルが示される。

生きがいの対象が豊富に存在し選択できることと、人間関係が良好で学習が容易であることが「まち(社会)」に求められる。観光地で言えば、魅力的な観光対象があり治安が良い(安心・安全)ということと同じである。

生きがいの成立モデル



(「人間に学ぶみちづくり」P.47より)

生きがい感がなければ、学習を経て次の選択へと移る。観光でも、学習によって余暇能力、旅のセンスを養う必要がある。

(3) 生き方と生きがい対象

①生活と人生

生活にもリズムとしてレクリエーション(休息、気晴らし)が必要である。人生(精神を含む生き方)には旅や旅行が必要である。

②生きがい対象

生きがい対象は次表の①から⑥に分類され、

それぞれが観光と関連している。経済は第三主体の事業者の目的であり、権力（知名度・誇り等）は第二主体が求めるものである。審美は、美しい所に人が集まること。宗教は、巡礼の旅。愛情は、旅先で出会う人の心の温かさ、などである。

生きがい対象

生きがいの対象		シュブランガーの分類					
		①	②	③	④	⑤	⑥
生き方の類型		経済人	権力人	理論人	審美人	宗教人	愛情人 (社会人)
A	A 追求人						
	B 無頓着人						
B	A 冒険人						
	B 逃避人						
AとB は対立	A 享楽人						
	B 義務人						
生き方の類型		①	②	③	④	⑤	⑥
生きがいの対象		経済型	権力型	理論型	審美型	宗教型	享楽型
		カンドールの分類					

（「人間に学ぶみちづくり」P.49より）

人間は長波長（季節等）から短波長（鼓動等）のリズムの中で生きており、観光地では、生きがい対象に対応する要素を、どのようなリズムで見せるかが大切である。ただ単に休息をはさむのではなく、精神的にも転換するようリズムの変化が大切である。

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

■2009年4月 計交研・当て塾共催セミナー （第Ⅸ講・第1回）

●日時：平成21年4月8日(水) 17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生
観光原論研究（12） 観光の意味論（つづき）

●参加者：8名（うち計交研関係3名）

〔講義概要〕

本年度は、昨年度より行ってきた「観光原論研究」を継続し、秋までには取りまとめを完成させたいと考えている。

今回は、前回（2月18日）に解説した「Ⅱ. 観光の意味論 1.3 観光と生きがい」の追加項目（3）③からである。

Ⅱ. 観光の意味論 1. 第一主体にとって

1.3 観光と生きがい

*（1）、（2）、（3）②までは解説済み

（3）生き方と生きがい対象 ③生きがい感

人々の生きがい感は、下記のように、発見し

た喜び、創造の喜びなどがあり、観光旅行への動機づけと一致する。

◇発見（初めて、唯一、優越 等）

◇創造（新しいもの、開拓、前人未踏 等）

◇守る・蓄積（文化財、本物 等）

◇参加（みんなで、共通の意識 等）

◇学ぶ・資格取得（ガイド、検定 等）

◇保養（温泉 等）

観光開発では、このような動機付けを適切に活用する、あるいは、規制・誘導することが大切である。そのためには、喜びや生きがいに関する研究成果を学ぶ必要がある。

ちなみに、生きがい感は感動や生存実感といった心の問題で、主に心理学で取り扱われる。しかし、心理学研究の大半は心の病に関するもので、喜びの研究は1/17にすぎない。

1.4 人間の営みの主要素の一つとしての観光

（1）文化の基礎と観光

文化の基礎は、学問・芸術・技術・教育である。伝えるものがあり、適切な教育があって文化が伝わる。その教育の一つが一般教養である。一般教養は、判断力を養う。

学問・芸術・技術・教育は、それぞれが興味深い観光対象になっているが、経験の少ない人には十分に理解されない。観光旅行により見聞を広めることで判断力が豊かになり、観光対象の意味が理解され、文化も伝わる。観光は、一般教養の重要な要素なのである。

この点から、修学旅行は、旅行の意味を学ぶ、旅行の面白さを知るきっかけとなるべきである。関係者は“修学旅行とは”という哲学を持つべきで、そのために「修学旅行の原論」が必要だ。

（2）非日常の体験・・・感動

夕焼けや大空を舞う渡り鳥などを眺めると、靈感にうたれるような感動がある。感激、感銘などの言葉でも表現される。こうした非日常の体験は、テレビやレジャー施設では体験できない。国立公園は貴重な非日常の体験の場であり、利用優先ではなく、生命力のある資源の保護・育成が重要だ。

思い出に残る体験とは、それだけ深い印象があったことで、希少価値がある。思い出に残る土産物やもてなしには、個人にとっての固有性と希少性が重要な要素となる。

(3) 心地よい疲れ・・・肉体と精神

普段は歩かない人も、観光地では興味に引かれて歩く。その時、心地よい疲れがある。疲れたけれど見応えがあったという思い出が残る。努力して歩き参加することで、印象が深くなる。車で通るだけでは印象に残らない。

(4) 生活感情と観光

レクリエーション、娯楽、休養などは、生活感情に関わるもので、非日常の観光旅行とは異なるが、関連する要素として整理する。

◇レクリエーション(生活リズムの疲れを癒す)

気分転換、使っていない感覚を使う

◇娯楽(三要素：飲む、打つ、買う)

古典から大衆まで(文学に学ぶ)

◇休養(温泉による治療・療養)

気晴らしとは異なる、温泉地の役割

◇修養(学習、文人の著作活動)

◇顕示(自己顕示)(土産話、旅行業)

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2009年4月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅸ講・第2回)

●日時：平成21年4月23日(木)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究(13) 観光の意味論(つづき)

②「当て塾」事務局 野倉 淳 氏

報告：足利市観光まちづくりシンポジウム

●参加者：21名(うち計交研関係8名)

〔講義概要〕

◆観光原論研究・13◆(鈴木忠義)

2. 第二主体(観光受地)にとって

2.1 空間レベル

観光の受地を考える場合、第一に、国レベルから施設レベルまでの空間の規模が問題になる。例えば、施設レベルで優秀なものがある。どの空間レベルを対象とし、どのように空間レベルを考えるかを研究する必要がある。

国レベル(国際観光)／地方レベル／県レベル／観光圏レベル／地区レベル(観光地)／施設レベル

2.2 公・共・私

受地において観光に携わる立場には、公・共・私(の三つ)がある。公共と呼んで政府・行政まかせではいけない。共同で行うことが重要である。景観や住みよい街などは、共同でなければ実現しない。そのための知恵とパワー(ボランティア活動等)が重要である。

私レベルでも、観光地の旅館など民間企業は、外との関係がなければ成立しない。“三方よし”の理念が重要である。

公共レベル／公社・公団・組合(公と民の良さが本来)／企業レベル(三方よし)

2.3 人間一所属と立場

観光地に住む人々からみると、どのような組織に所属し、または個人で、どのような職業で観光に関わっているかが重要である。奉仕(ボランティア)としての関わりもある。これら一つひとつが研究対象である。

組織人間／個人／職業／奉仕

2.4 経済効果 *後日解説予定

2.5 非経済効果

知名度が上がり郷土の誇りとなる、人々の交流が生まれる、観光客が訪れることで体験的に相互扶助を学ぶなど、経済的なもの以外にも多様な観光の効果がある。

海外の人々は日本の製品に関心を持ち、それを造る国に関心を持つ。そうした人々を迎えることで誇れる国づくりにつながる。

誇り／交流／相互扶助／教育効果／
・・・地域の文化環境ということ

◆報告：足利市観光まちづくりシンポジウム

2009年3月14日に開催された「足利市観光まちづくりシンポジウム」(主催：足利市観光まちづくりシンポジウム実行委員会／「当て塾」が参画)の講演概要を報告した。

各講師の講演目次は以下のようである。歴史的遺産を有す地方都市での徒歩圏の形成を中心テーマとし、原論、魅力づくり、組織づくり、都市基盤づくりの講演であった。

□基調講演(鈴木忠義先生)

- 1.なぜ足利市で観光なのか/2.観光に関わる3つの主体と観光の意味/3.足利市の評価/4.徒歩圏をつくる/5.今後の取り組み

□部門別講演

1.美しく魅力ある地域づくり(原重一先生)

- (1)都市、観光地の盛衰/ (2)地域と「美しく魅力的」ということ/ (3)都市の観光魅力と都市観光/ (4)日本一の観光地(都市)東京/ (5)100万都市札幌の観光魅力/ (6)高山市の観光魅力/ (7)足利市の場合

2.まちづくりの推進体制(花岡利幸先生)

- (1)地元主体のまちづくり/ (2)「地域住民に共通する幸せの生活条件を満たす行為」がまちづくり/ (3)まちづくりのあり方の変化/ (4)新しいまちづくりスタイルの骨子/ (5)足利市のまちづくり組織への期待

3.歴史的都市の基盤づくり(永井護先生)

- (1)拠点と軸/ (2)歴史的都市の保全・活用/ (3)徒歩圏/ (4)足利市の歴史的都市の基盤づくり

(文責:「当て塾」事務局 野倉 淳)

■国土について語り合う会(麴町塾)

●今期に入り新たな事業活動として、中村英夫前会長(東京都市大学学長)のご発意のもと、次のような趣旨をもって勉強会をスタートいたしました。外部の有識者の方々と会員との意見交換を活発にするため、また会議室の都合により、少数の参加とはなりますが、希望先着順により広く参加をいただきながら進めてまいります。

●趣旨: 私たちは、素晴らしい国土に住んでおりますが、ここはまた、多くの問題も抱えています。今後とも未来永劫に亘り、この地に住む私たちの子孫のために、この国土をどのようにしてゆけばよいかを語り合う。

●開催 ほぼ月一回開催し、参加者のお一人の基調スピーチのあと、参加者による意見交換を行う。

第1回 4月13日 大石 久和 国土技術研究センター理事長によるスピーチ

第2回 5月22日 竹村公太郎 リバーフロント整備センター理事長によるスピーチ

第3回 6月24日(予定) 涌井雅之 桐蔭横浜大学医用工学科教授によるスピーチ

□ Backyard

事務局通信 □

■一般社団法人化の手続き状況

理事会での定款に関する指摘を受けて修正のち、6月末に定款認証および設立登記する予定です。

計画・交通研究会

会長	森地 茂
副会長	石田 東生
副会長	家田 仁
副会長	屋井 鉄夫
事務局長	水野 高信
会報編集委員長	中井 祐

〒102-0083

東京都千代田区麴町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774

FAX=03-3221-5489

E-Mail=

jimukyoku@keikaku-kotsu.org

Homepage =

<http://www.keikaku-kotsu.org/>